

前述の如き次第であるから單に學名命令法より本州及四國等の兎の學名は次の諸案に準じて決せらるべきである。

第一案。エチゴウサギ及ノウサギの間には仙臺附近のナベウサギの如きものあるにより完全には區別し難き場合。

I. *Lepus brachyurus brachyurus* TEMMINCK (syn. *L. b. angustidens* HOLLISTER; *L. b. etigo* ABE). ウサギ(エチゴウサギ、ナベウサギ、ノウサギ等を含む。)

第二案。エチゴウサギ及ノウサギ間には今後完全なる識別點が捕捉されてこの二者だけが二亞種とせらるべく、且つタヤマノウサギが全くノウサギと同物なる場合。

I. *Lepus b. angustidens* H. ノウサギ。

II. *Lepus b. brachyurus* T. (syn. *L. b. etigo* A.) エチゴウサギ。

第三案。右二者以外に第三の亞種があり(假にこの第三の亞種をナベウサギなりと做す)、且つタヤマノウサギが同前なる場合、

I. *Lepus b. angustidens* H. ノウサギ。

II. *Lepus b. etigo* A. エチゴウサギ。

III. *Lepus b. brachyurus* T. ナベウサギ。

第四案。以下は之に準ずるが略する。第一案は目下の所最も平易に用ゐ得る。第二案には未だ吾人が首肯し得るだけの識別點が捕捉されては居ぬ。第二案に拘泥する

位ならば却つて第三案以下迄急進する方が吾人を引き付けるものあらうけれども、是等も未だ吾人が首肯し得るだけの識別點が捕捉されては居ぬ。

要之、第二案以下に進む爲めには未だ多くの材料を集めねばならぬ。殊に第二案に對しては接觸帶なる同一地方よりのエチゴウサギとノウサギとを對照する事が肝要である。山形のエチゴウサギと東京附近乃至以南のノウサギとを對照したのでは仙臺附近のナベウサギの如きものある以上眞の兩者の對照にはならぬ。予は尙ほ仙臺附近の材料を多く集めたり、行く／＼は附屬動物園が出来たらう時飼養したりして見やうと思つて居る。

(松本彦七郎)

●兎の變色問題の係争點

阿部氏高著『エチゴウサギの季節的變色に就て』を讀むに、その緒言とも見るべき『係争點』の部に從來の諸説を掲げられてあり、此の問題の現狀として『從來の諸發言者の多くは冬季の白化を色の脱ける事に歸して居り、諸説の論據は何れも十分信賴するに足るとは稱し難い』由を述べられて居る。從來の學界がそれ程迄に混沌たるものであつた以上は氏の研究が學界に貢獻した功績は甚だ偉大なものと云ふべきである。

BREHMS Tierleben の哺乳類の部第二冊を繙く。兎の生態學的方面の事がよく書いてあり、是に據りても問題

の現狀を伺ひ得る。是にも諸學者の説が述べてあり、又『兎の變色に就ては久しい間謬認されてあつたが、實は色その物の交代では無く毛の交代に依る』のである由を述べてある。ALLENの研究は勿論、又伯林動物園に於て兎の毛をアニリン色素を以て染め置きて變色が毛の交代に依るものである事を確證した由迄述べてある。即ち阿部氏が千代濡羽を以て實驗せし如き有力な方法も既に阿部氏前に行はれて居たのである。阿部氏の云はるゝ『問題の現狀』とこれにある所との間には雲泥の差がある。前者に據れば學界は暗黒であつたのであり、後者に據れば學界は光明であつたのである。果して何れが正しいのであるか。

予は斯かる事を以て強ちに阿部氏の研究の價値を排斥し去らうとするものではない。阿部氏の研究には肉眼的觀察と組織學的研究との二方面がある。後者はTSCHNIKOFFの説に對比して又それ自身單獨として甚だ價値のあるものであらう。併しそれは『兎の變色に際しての組織學的研究』として價値あるものであり、『兎の變色問題』それ自身に就て最後の決定をなすものであるとはALLENの研究を『證據不十分』視する限り承認し得ざるべきである。何となれば是もALLENの研究と同様、何處迄行きても死せる標品に就ての系列を追ふに過ぎざるものであるからである。勢ひ阿部氏をして満足せしめ得る程の最後の決定は生けるものに就ての千代濡羽實驗の

如きものに據らねばならぬ譯である。而してそれは既に阿部氏前に行はれた事である。但しこの點に於ても阿部氏の研究を全然無價値と云ふのでは無い。他の白化兎に就て知られた所を日本の白化兎に就ても裏書し又確證を追加し得たと云ふ事にはなる。併しそれならば問題は局限され來て居るのであるから、阿部氏の緒言としての『係争點』の部に述べてある如き一般的問題として取り扱ふ事は應しく無からう。

因に阿部氏の『エチゴウサギの分布』には仙臺附近の兎は凡てエチゴウサギである様にあるが、實はノウサギも澤山居る事確實である。仙臺附近では後者をナベウサギと呼んで白化する兎より區別して居る。是は一月にも確に捕獲し得るものであるから。白化前のエチゴウサギと見るべきでは無い。又仙臺附近の海岸より隔つた根白石方面にも是が居る。予の手元にはそれ〴〵十二月下旬と一月下旬とに射獲した根白石方面よりのナベウサギとエチゴウサギとの各一頭の標品が保監されてある。このナベウサギはノウサギとして標準的では無く、幾分白化せんとするの傾向を示したものである。併し又標準的のエチゴウサギたるべくは十二月下旬としては遅れ過ぎて居る。*L. timidus* 群の他の兎に就ても同種でありながら白化せぬものから不完全に白化するもの迄又それから完全に白化するもの迄等の種々の段級がある事が云はれてあるから、日本兎にありても接觸帶附近に於て斯かる事あ

つて可いのであらうかも知れぬ。尙ほ研究の餘地は十分にある。更に阿部氏が山形の兎を東京にて完全に白化せしめたと云ふ實驗はそれで可いとして、東京では接觸帶に餘り接近して居るから、尙ほ慾を云へばエチゴウサギを一層南方に移し又ノウサギを遠く北方へ移して白化の有無乃至程度如何を見る事も今後に於ける研究の一であつて欲しいものである。

(松本彦七部)

●ニキビノムシ科の起原及類縁

ニキビノムシ科 (Denodeidae) は多くのダニ學者に依つて他のダニとは餘程かけはなれたものと考へられて居る。クラメル氏 (KRAMER 1877) やカネストリニ氏 (CANESTRINI 1891) の六群式分類では氣門が無いと云ふだけの理由でヒゼンノムシやフシダニと共に一括して無氣門類 (Astigmata) とされたが、之を至當の位置と考へる人は今日のダニ學者の内には恐く一人もあるまい。

次にトルーエサル氏 (TROUSSART 1892) の二群式分類になるとヒゼンノムシとは引はなされて、フシダニと共に蠕様類 (Vermiformia) と云ふ群にされた。此群の特徴は體の非常に長くなつて居る事と其の腹部に横の環節様輪線の存在する事と、共に他生物に寄生する事である。バンクス氏 (N. BANKS, 1905) の八群式分類では群名こそニキビノムシ類 (Denodicoides) と改められたものの、其のニキビノムシの取扱には内容上些の變化も認められぬ。ワーバートン氏 (C. WARBURTON 1909) の六群式分類は

クラメル、カネストリニ兩氏とトルーエサル氏を折衷した様なものに、更にアシナガダニ (*Ophiacarus*) の爲めに一亞目を創設して附け加へたるものであるが、ニキビノムシ科の取扱はトルーエサル氏と殆ど同じことで、寧ろ他群からのかけはなれの度を少く低くしたかの様に見える。

クラメル、カネストリニ兩氏の無氣門類の不自然なる事は既に公知で論外に置くも、トルーエサル、バンクス、ワーバートン三氏の蠕様類とがニキビノムシ類なるものも亦頗る不自然なる群との評を免かれない。現に(バンクス、ワーバートン二氏は何とも言はぬが)蠕様類の一群を以て他のすべてのダニに對抗させた最初の人なるトルーエサル氏は直ちにフシダニ科、ニキビノムシ科の二つにわけただけでは満足が出来ず、フシダニ科を四脚類 (Tetrapoda) ニキビノムシ科を八脚類 (Octopoda) なる上科名の下に夫々排斥したのであつた。

ウーデマン氏 (UDEMAN 1896-97) もニキビノムシ科の類縁を考へてみた一人であるが、氏は哺乳類に寄生するヒゼンノムシ科 (即ち無氣門) から出たかにはのめかし亦特にニキビノムシ類 (Denodes) はツメダニ科の「ブッレルガテス」属 (*Psorergales*) にひどく似て居る事を示して注意する事を望んで居る。此「ブッレルガテス」属もネズミの皮下寄生蟲で素人見にはヒゼンノムシ科に似たものである、故にニキビノムシ科の類縁をヒゼンノム